

歌メロディのスタート・ポイントと長期記憶

(5)BS20世紀日本のうたベスト10曲に見る傾向

著者	藤井 正博
雑誌名	神戸山手短期大学紀要
号	52
ページ	117-132
発行年	2009-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000834/

歌メロディのスタート・ポイントと長期記憶(5)

—— BS20世紀日本のうたベスト10曲に見る傾向 ——

Startpoints of Japanese Song Melody and Long Term Memory (5)

藤 井 正 博

キーワード：メロディ、長期記憶、日本の歌

<前号までの章構成>

- I. 分析視角—歌メロディのスタート・ポイントの3パターン分類—
- II. 分析対象曲—BS20世紀日本のうたベスト10曲—
- III. 考察(1)—遅出パターンと長期記憶—
- IV. 考察(2)—早出パターンと長期記憶—
- V. 考察(3)—Just パターンと長期記憶—
- VI. 考察(4)—強拍と長期記憶—
- VII. 考察(5)—音高進行パターンと長期記憶—
- VIII. 考察(6)—BS ベスト100曲のメロディ・パターンと長期記憶—

(拙稿「歌メロディのスタート・ポイントと長期記憶(1)(2)(3)(4)—BS20世紀日本のうたベスト10曲に見る傾向—」『神戸山手短期大学紀要』47・48・49・51号、2004・2005・2006・2008年)

<前章の最終段落>

本小論は、どのようなパターン・特徴を持つ歌メロディが長く多くの人の記憶に残るかというテーマでここまで考察を進めてきた。考察の重心は「多くの」に偏ってきたようである。「長く」についてはBS投票の過去5年以前の日本の歌とひと括りしただけで、その歌メロディが記憶されてきた時間の長さについてほとんど言及してこなかった。例えば第1位の「川の流れのように」(1989年発売)と第7位の「荒城の月」(1901年作曲)の間には90年近い記憶時間の差がある。両者を単に長期記憶曲と括って同列に論じていいはずはない。長期記憶曲における時間ファクター、この問題を一度は考察しておく必要がある。難しい問題であるが幸い表

1) から〈表4〉が手掛りを与えてくれているので、次章でトライしてみたい。が、紙数の関係上号を改めて論じることとする。

IX. 考察(7)―長期記憶曲における時間ファクターと BS ベスト10曲の将来的行方―

前章に掲げた〈表1〉―〈表4〉から長期記憶曲における時間ファクターという点に関して読み取れることは以下の通りである。唯一確実に言えるのは、およそ30年スパンの第1期(1901―29年)、第2期(1930―64年)、第3―5期(1965―92年)のBSベスト100ランク・イン曲数がそれぞれ順に7曲、16曲、60曲であり、1997年投票時点から遠い時期ほどランク・イン曲数が級数的に減少している点である。ここでは単純な数式化は避けるが、このランク・イン曲数の減少カーブはごく一般的に知られている記憶の減衰曲線と類似する傾向を持っている。無論、短期で個人の記憶曲線と長期で多数の投票者による投票結果のある種の類似性を論ずるのはまったく早計にすぎると言わざるをえないが、数百万のBS投票者の脳の総和も全体としてある種の記憶減衰メカニズムを持っているのではないかと考えることは実に興味深い。が、あまりに大きな問題なのでここではこの問題に深入りはせず、以下考察を進めてゆく。

3つの時期に作曲・発表・発売された歌が1997年の投票時点に至る年数は、第1期が96―68年、第2期が67―33年、第3―5期が32年―5年である。が、これらの年数は単純に個人の脳・心における持続的な記憶年数を意味するものではない。この点は第1期に作曲・発表された歌の多くが日本人の平均寿命を越えていることを考えるだけでも明らかであろう。ではこの問題をどう考えればいいのか？

先ず第3―5期から始めよう。この時期は他の2つの時期と比べて上記の作曲・発売後の年数と投票者の歌記憶年数とが最も接近していると言える。無論様々な例外はあろうが、この第3―5期中の1曲に票を投じた投票者のほとんど多くはそれらの曲がヒットしている時期にそれらの曲を好きになり、その後様々な時間を経た後最終的に自分のベスト3の1曲に選び、投票したと考える。簡略化すればリアル・タイム記憶の持続と言えようか。このことは投票の翌年BS2で放送された「BS20世紀日本のうた―グランド・フィナーレー」で紹介されたベスト10曲の支持年代層の分布から伺い知ることができる。この第3―5期のベスト10ランク・イン5曲中「川の流れのように」を除く他の4曲の支持年代層は「神田川」(1973年発売―投票当時40代男性の1位)、「いい日旅立ち」(1978年発売―30代・40代女性の1位)、「いとしのエリー」(1979年発売―30代の1位)、「秋桜」(1977年発売―30代・40代女性の支持)となっている。それぞれの発売年と投票年および支持年代層との関係を考えてそれぞれの曲の投票者の多くは10代・20代の頃にヒットしていて好きになったそれぞれの曲を20年前後の時を経た後に自分のベスト3の1曲として投票したと容易に推測できる。これらの曲は作曲・発売まもなくリアル・タイムに記憶され、その後20年前後の時間の流れにも消えず投票者達の脳に強力に記憶され続けたのである。言わば投票当時30代・40代の「世代の歌」と言えようか。

こうした「世代の歌」はどのようなメカニズムで生まれるのか？上記の曲への投票者達は何故に新しいヒット曲を選ばずに20年前後も昔の古い歌を選び投票したのか？個人差はあるが一般的に新しいものを吸収する脳の力は20代後半頃から低下し始めると言われている。脳の総合的な力は40代頃まで上昇し続けるようであるが、仕事や子育てが忙しいといった社会的環境的要因ともあいまって30代・40代ともなると次々に発売され、流れるヒット曲を吸収しにくくなり、それ故に好きになりにくくなるようである。「今時の歌は…」と嘆いたことのある中高年の方達は、御自分の経験を思い起こしてみればこの点容易に納得されるであろう。こうして中高年の多くは青春時代に好きになった歌をカラオケで相も変わらず延々と歌い続けることになるのである。それらの歌の中からその世代が最大公約数的に好む「世代の歌」が生まれてくることになるのである。

リアル・タイム記憶の持続を基本的特徴とする第3－5期のランク・イン曲の対極にあるのが第1期のそれである。すでに少し触れたが、第1期のランク・イン曲はその作曲・発表年と平均寿命との関係から考えて同一個人のリアル・タイム記憶の持続による投票の産物とはほとんど考えにくい。話をわかりやすくするために、例えば「荒城の月」に投票をした70代の女性の場合を仮定してみよう。1927年に生まれた彼女は「荒城の月」が作曲された1901年時点でこの曲を聴くことは当然できない。彼女がこの曲を聴いたのは例えば作曲後30数年ほど後の1930年代のいつかであったであろう。その後彼女は60年ほどこの歌を記憶し、1997年投票した。ここで注目したいのは60年の記憶年数ではなく、彼女が作曲後30年以上、すなわち1世代を経た後にこの曲を聴いたという点である。この「荒城の月」は言わば「世代を越えた歌」ということができようか。この場合と同様にこの第1期のランク・イン曲は大なり小なり「世代を越えた歌」とその特徴を規定できよう。第1期と第3－5期のランク・イン曲は「世代を越えた歌」と「世代の歌」という点で質を異にする。第2期については、第1期と第3－5期の中間の時期であり、前後両時期の特質が混在している時期とここでは理解しておこう。

「世代を越えた歌」と「世代の歌」との質の違いを時間ファクターではなくランク・イン曲数で数量的に考えてみるとどうなるか？本章冒頭で確認したようにベスト100曲のランク・イン曲数は第3－5期60曲、第2期16曲、第1期7曲と投票時点からおおよそ30年≒1世代遠ざかるごとに級数的に減少している。この減衰傾向が人間集団総体の脳の記憶メカニズムにおけるある種の本質的な傾向だと仮定できれば、次のように考えていい。例えば第2期終了から5年後の1969年にこのBS投票と同質・同規模の投票が行われていたとしたら第2期ベスト100ランク・イン曲数はおおよそ60曲前後、第1期のそれはおおよそ16曲前後、それ以前の時期のそれがおおよそ7曲前後だと考える。また同様に第1期終了の5年後の1934年に同様の投票が行われたとしたら第1期60曲前後、それより前の時期が23曲前後の結果となると考える。こう考えると「世代を越えた歌」とは級数的な減衰の荒波に抗してなおベスト100に残り続けること

ができた力あるいは魅力を持っている楽曲であると言うことができようか。

級数的な減衰の荒波とはどの程度のものか？ 先の仮定で考えるとベスト100レベルではおよそ30年 \div 1世代を経ると7割余り（ $60-16=44$ ）がベスト100圏外へと去り、2世代を経ると9割弱（ $60-7=53$ ）が圏外へ去る。2世代を経てもなおある程度多くの票数を得てベスト100に残り続ける歌、すなわち「世代を越えた歌」は多数の「世代の歌」候補の曲の中の1割余りである。こうした級数的な減衰の荒波は当然未来にも止むことなく打ち寄せているはずである。このBS投票から2世代を経た60年後の2057年に同質・同規模の投票が行われたと仮定すると第3－5期のベスト100ランク・イン60曲のうち50数曲はベスト100圏外へ去ることになる。新たに「世代を越えた歌」としてベスト100に残り続けるのはわずか6－7曲であろう。それは第3－5期に日々作曲・発売された1万曲程度のごくわずかの確率である。この未来の新たな「世代を越えた歌」となる候補はやはりベスト10ランク・イン曲に可能性が高いと思われるが、この問題についてはのちに検討することとする。

では前章まで考察を続けてきた各メロディ・パターンについてはどうか？ 級数的な減衰の荒波の打ち寄せ度合いはパターンによって違いはあるのか？ 先ず第1－第2音符上昇・同音・下降パターンに関しては〈表2〉からわかるように程度の微妙な差はあるが、各パターンとも急激な減衰傾向にあり、パターン間の大きな差異はさほど認められない。早出・Just・遅出パターンに関しては表面上の数値ではパターン間に差異が認めうる。〈表4〉からわかるようにJustパターンはおおむね急激な減衰傾向を示しているが、早出パターンは第1期から順に $3>2<25$ と通常の減衰カーブとは異なっている。また遅出パターンは $0<6<16$ とこれも異なっている。が、これらの数値結果はすでに前率でみたように早出・遅出両パターンの出現率の時代による劇的変化に起因すると考えられるものであり、遅出＝弱パターンが減衰の荒波を最も受けやすいパターンだと少なくともベスト100レベルにおいては単純に結論することはできない。この点に関してはもう30年以上待たなくてはならない。

〈表1〉の3文字パターンについてはどうか？ 弱（遅出）の3文字パターンについては上に述べた理由で、現在のところ結論に至らない。また強・疎の3文字パターン（ $0<5<11$ ）についても弱パターンの場合と同様に第1期の出現率に問題があり、早々に結論は出せない。残る3文字の強・密パターン（ $7>5<33$ ）については何か意味のある結果が導き出せるだろうか？ 強・密・下パターン（ $1=1<2$ ）については見かけ上の数値バランスから減衰の荒波を受けにくいようにも見えるが、何ととってもランク・イン曲数が少ないし、また前章の〈表5〉からわかるようにベスト10には1曲もランク・インしていない。「長く」という点で評価はできても「多く」の支持を集めるという点では難のあるパターンと言えようか。やはり注目すべきは強・密・上（ $3=3<19$ ）と強・密・同（ $3>1<12$ ）パターンであろう。両パターンはすでに見たように世代を超えたと言える歌をそれぞれ3曲生んでいるパターンであり、ベスト

10に9曲ランク・インさせているパターンである。が、前章後半で見たようにこれらはさらに4文字パターンに細分化して考察する必要がある。

〈表3〉〈表5〉をもとに残された4文字パターンについて分析すると次のように言える。早・強・密・同パターン（ $1 = 1 = 1$ ）は先に考察した強・密・下パターンとほぼ同様の理由で「長く」では評価できて「多く」では難がある。J・強・密・同パターン（ $2 > 0 < 11$ ）は減衰の度合いは大きい「荒城の月」と「故郷」という「世代を超えた歌」を7曲中の2曲も生んでいるパターンでもあり、「長く」「多く」の基本的条件を満たしたパターンであると言える。残る2パターンについてはより詳細に分析しよう。

早・強・密・上（ $2 > 0 < 17$ ）は前章で見たように4文字パターン中最も多くの曲をベスト100にランクインさせているパターンである。減衰の度合いは非常に大きいと言えるが、第1期では「月の砂漠」「早春賦」という「世代を超えた歌」を2曲生んでいる。特筆すべきは第3－5期に偏っているとはいえベスト10に5曲もランク・インしているパターンである。この早・強・密・上パターンは現時点では最も「多く」の支持を集めることのできるパターンであり、「長く」の可能性も十分に高いパターンでもある。これに対してJ・強・密・上パターン（ $1 < 3 > 2$ ）は対照的である。ベスト100ランク・イン曲数は見ての通りそれほど多くはない。また第1期の「世代を超えた歌」は1曲にとどまっている。だが、前章で指摘したようにベスト100のランク・イン曲数に対するベスト10ランク・イン率は5割と最も高率のパターンであり、しかも第1期、第2期、第3－5期に万遍なくそれぞれ1曲ベスト10入りさせている。証明は残念ながら現時点ではできないが、先述した仮定がある程度の得ているとすればこのJ・強・密・上パターンは最も減衰の荒波を受けにくく「長く」しかも同時に「多く」の支持を集め続けることのできる最良のパターンであると考えることができる。

が、これで両パターンの優劣に決着がついたわけではない。前章で指摘したようにある種の不自然さを持ち、脳に強い刺激を生むJ・強・密・上パターンはそれ故に良いメロディを作り出せる確率はさほど高くない。このパターンで良いメロディを生むには多くの試行錯誤とある種偶然のインスピレーションが必要と思われる。これに対してごく自然でシャープさのある早・強・密・上パターンは良いメロディのできる確率が高いが、それだけに減衰の荒波に抗して「長く」生き抜いていく力強さにはなお不安が残る。どこまでいっても決着が付きそうにないが、実は興味深いことに両パターンの合体と考えるタイプのメロディもある。例えば「いい日旅立ち」がそのタイプである。この曲は早・強・密・上パターンを代表する1曲であるが、早出部分の第1音符をカットして考えるとJ・強・密・上と表記しうる第2音符以降のメロディ・パターンを持っている。要するに複縦線上の第2音符（強拍）から第3音符へ上昇しているのである。あまりに複雑になりすぎるので本小論では第2－第3音符のパターン化は断念したが、あえてこの曲を表記すれば早・強・密・上・J・上パターンとでも書けようか。この合体タイ

プのメロディが両パターンのプラスの特徴を相乗的に併せ持つかどうかは早断はできないが、この合体型のメロディがこの曲をベスト10の第2位に押し上げた重要な要因のひとつであると筆者は考えている。またこれと類似した早出とJ・上パターンの合体タイプ曲は他にも複数ベスト100曲の中に見い出すことができるが、ここではこれ以上深入りしない。

こうして両パターンの優劣にはなお最終的な決着がつかないままであるが、長期記憶曲におけるもうひとつの時間ファクターの問題に移る。それは加齢と好みの変化の問題である。個人差は当然あるが、一般的に以下のことが知られている。まずテンポについては若者はアップからスローまで幅広く受容するが、高齢者は速いテンポの曲をあまり好まない。曲調やビート感については若者は激しいものから穏やかなものまでこれも幅広く受容するが、高齢者は基本的に穏やかなものを好む傾向にある。また意味ではなく音声面での歌詞については一とりあえず日本語と英語のみに限って言うとも若者は日本語も英語もさほど区別なく受容するが、高齢者は母語である日本語の歌詞を明らかに好む。こうした変化が何歳ごろから始まるのかについては軽々には言えないが、少なくとも長期の加齢によって歌の好みが変化あるいは否応なく限定されてゆくという点については多くの方が納得されるであろう。

こうしてある程度年齢を重ねてゆくと10代・20代の頃に好きになった多くの日本の歌について新たな順位付けあるいはランク付けが個人の脳の中で自然と行われ始めるようになる。無論歌は個人的な思い出や印象的な出来事等と強く結びついて記憶されているものであり、一般的な加齢による好みの変化が個人レベルでは新たな順位付け・ランク付けに即反映されるとは限らない。が、数百万人単位の脳の総和というレベルでは間違いなくある程度は反映されると考えうる。新たな順位付け・ランク付けで上位に上ってくる、あるいは上位に残り続ける傾向があるのは、テンポはミディアムからスローで曲調やビート感は穏やかめで日本語歌詞がメインの歌、一言で言えば情感・叙情性のある歌である。逆に言えばアップ・テンポで英語が多用されたビートがビシバシの激しい曲調の歌はこの新たな順位付け・ランク付けで下位に転落してゆくことになる。加齢による好みの変化が起こる要因は基本的には広義の意味での老化に起因する心身のエネルギー低下によるものと考えられるが、ここでは深入りしない。

本小論で考案を続けてきたベスト10対象8曲はまさにこの新たな順位付けが反映したものと考えることができる。これら8曲の支持層の多くは中高年であり、「高校三年生」を除く7曲はテンポはミディアムからスローで激しくなく日本語メインの歌で先述した情感・叙情性のある歌に当てはまる。「高校三年生」もマーチ・ベースでテンポは速いが、短調メロディで深い情感を表現する「あー」のロング・トーンが歌詞中に使われており、情感・叙情性のある歌と言ってもいいと思われる歌である。これらの歌を自分のベスト3の1曲に選んだBS投票者達はすべて10代・20代の頃初めてその歌を聴いた時点から投票時点までずっとその歌がベスト3曲だったのであろうか？無論そうした投票者も多くいたかもしれない。が、加齢による新たな順位付け・ランク付けの結果それらの歌が各自のベスト3曲にランク・インしてきた投票者も

数量的に明らかににはできないがある程度いたのではないと思われる。例えばすでに見たように「いい日旅立ち」「秋桜」の強力な支持層は投票当時30代・40代の女性であったが、彼女達の多くは山口百恵ファンだったはずである。とすれば彼女達の多くは10代・20代の頃、例えば同歌手のアップ・テンポでビートのきいた「プレイバック Part II」や「横須賀ストーリー」といったヒット曲も上記2曲と同程度に好んでレコード等を買っていたと考えうる。が、20年ほどの加齢の後に彼女達がベスト3曲に選んだのは圧倒的に前者—情感・叙情性のある2曲であったのである。後者2曲はベスト100曲にもランク・インしていない。また、論述はしないが「いとしのエリー」と「勝手にシンドバッド」にも同様の関係が認められる。1人3曲自由選曲という投票上のルールにおいてはこうした加齢による新たな順位付け・ランク付けがかなりの程度選曲結果に作用したと考えていい。こう考えてくると長く多くの人の記憶に残り続ける日本の歌のごく基本的な条件は上記の情感・叙情性のある歌とすることができようか。

ではアップ・テンポでビートのビシバシきいた英語の多用された日本の歌が長く多くの人の記憶に残り続ける可能性はまったくないのか？無論皆無ではない。考えられる可能性はそうした曲が絶えず次の若者世代にアピールし、繰り返し聴かれ続け、歌われ続ける場合である。が、レコードやCD等のオリジナル音源は30年後・60年後の若者が聞いた場合その音自体をどうしても古臭く感じてしまう。それ故新しい時代の新鮮な音の衣をまとったそれらの曲のカバーが行われる必要がある。無論そうした曲調のすべての曲がカバーされるわけでは当然ない。ここでも減衰の荒波が作用し、そうした曲調の中でカバーされるかされないかの選別が激烈に行われ続ける。またカバーされる場合でもそうした曲調ではなく、かつてリアル・タイム記憶者であった中高年向けにスローで穏やかな曲調にアレンジされ、カバーされる場合も多い。やはり長く多くの人の記憶に残り続ける日本の歌の基本的なキーワードは情感・叙情性のある歌ということなのだろうか。何故にそうなのかという問題については、母音の多い日本語を母語とする日本人の日本の歌に対する感性—万葉の時代から延々と続く感性によるもの—とだけここでは言うておく。

最後に以上のことをすべて踏まえつつBS ベスト100曲・ベスト10曲の将来的行方について以下見ていこう。すでに簡単に触れたが、仮にこのBS投票から30年後の2027年および60年後の2057年にこれと同質・同規模の投票—1人3曲自由選曲・1千万以上の投票—が行われたとしたら第1期・第2期・第3—5期のベスト100・ベスト10ランク・イン曲はどのように変化すると推測できるだろうか。当然この間に10万曲以上の新しい日本の歌が作曲・発表・発売されていくだろうし、超高齢化時代の到来で高齢者の投票率が増加すると予測もされる。未来のことは誰にも確実に言い当てることはできないが、とりあえず本小論の考察から導き出した傾向を手掛かりにしてベスト100から簡単な検討を始めよう。(楽曲関係者の中で不快な思いをされる方がいるかもしれないが、歌メロディ研究進展のためでもあり、お許しいただきたい。)

先ず、第1期のベスト100ランク・イン曲数は級数的減衰傾向から考えると2027年には4曲程度、2057年では2－3曲程度と推測される。ベスト10ランク・イン2曲を除く5曲のうち将来的に最もベスト100圏外へ去る可能性が高いと考えられる曲は「七つの子」であろう。この曲のメロディ・パターンはJ・強・密・下であり、第1－第2音符下降の故である。残り4曲については容易に判定しにくい、「仰げば尊し」が次いで圏外に去りやすいかもしれない。メロディ・パターンは早・強・密・同と別にマイナス要素はないが、卒業式で次第に歌われなくなっている傾向にあるが故である。「故郷」はメロディ・パターンよりもその歌のテーマの力によって何とかベスト100に将来的にとどまるのではないと思われる。メロディ・パターンのみから考えれば「早春賦」はベスト100に残り続ける可能性は高いと言える。この曲のパターンはすでに触れた早出とJ・上の合体タイプで早・強・密・上・J・上と記すことができるものであり、プラスの要素が作用すると考えられる。インパクトのあるその出だしのメロディは耳にする機会があれば長くある程度多くの人の記憶に残り続けていく力があると考えうる。ママさんコーラス等で繰り返し歌い継がれていけば2027年にはなおベスト100をキープできているであろう。が、2057年にはそれでもやはり当落線上であろうか。最も判断が難しいのが「月の砂漠」である。メロディ・パターンは早・強・密・上とプラス効果が期待されるし、情感、叙情性も申し分ないが、現在10代までの子供時代に耳にし、歌われる機会が減少しているようである。もともと童謡として作曲された曲であるが、芸術的側面が強調された歌唱が行われすぎているようにも見える。こうしたどっちつかずの状態が続くようだと減衰の荒波に抗してベスト100圏内に残り続けるのは難しいかもしれない。

第2期についてはどうであろうか？2027年には6－7曲、2057年には4曲程度と減少が予想される。2057年にはリアル・タイム記憶投票者はほぼいなくなり、「世代の歌」として彼らの支持を集めた曲はベスト100圏外へ去ることになる。残り続けるのは世代を超える力を持った曲ということになるが、「高校三年生」を除くその候補曲は以下のように考えることができるか。早出パターンは2曲と少ないが、この2曲—「リンゴ追分」早・強・密・同と「学生時代」早・強・疎・上—はプラス効果も期待され、ある程度候補曲と考えていい。Justパターン7曲のうち歌のテーマの力とともにメロディ・パターンのプラス効果も期待される2曲—「青い山脈」J・強・密・上と「ここに幸あり」J・強・疎・上—が候補として妥当であろうか。ただし近年クラシック音楽の側から戦前の歌謡曲の歌い直しも行われており、この試みが成功すれば「影を慕いて」「人生の並木路」も候補に浮上してくるかもしれない。「リンゴの歌」(J・強・密・下)は個人的に好きな曲ではあるが、第1－第2音符下降パターンの故に残念ながらベスト100に残るのは厳しいと思われる。弱＝遅出パターン6曲のうち「上を向いて歩こう」と「いつでも夢を」の2曲は候補として異議はなからうが、リアル・タイム記憶投票者がいなくなった2057年になおベスト100に残るだけのある程度多くの支持を減衰の荒波と弱＝遅出パターンのマイナス効果に抗しつつ集めることが可能であろうか？この2曲の将来的な動

向は弱＝遅出パターンのマイナス効果の検証という意味でも今後注目される。

第3－5期は最も大きな減衰の荒波を受ける時期である。リアル・タイム記憶投票者は2027年にはほぼ高齢化し、2057年にはごくごくわずかとなる。60曲もあったベスト100ランク・イン曲は2057年には6－7曲程度に減少することが予想される。ベスト10ランク・イン5曲を第1候補として除いて考えると残りはわずか数曲である。プラス効果が期待される早・強・密・上パターン曲だけでも13曲もある。他のパターンとの競争だけでなく実は同種のパターン内でもベスト100生き残りの激烈な競争が行われているのである。このままでは第2候補曲の予想すらできないので、ここでパターンをより細分化して考えてみる。第Ⅶ章では考慮したが、第Ⅷ章ではあまりに複雑になりすぎるのでパターン化をやめた第1－第3音符連続上昇パターンである。ここでは弱および疎を含むそれについては考えず、あくまでも強・密での連続上昇パターンのみに限定し、さらにそれを3タイプに分類して考えると第2候補曲は次のようになるうか。

J・強・密・上・上ーなし

早・強・密・上・J・上ー「知床旅情」「I LOVE YOU」

早・強・密・上・上ー「瀬戸の花嫁」「君といつまでも」「襟裳岬」「なごり雪」「時代」「昂」以上が強・密・第1－第3音符連続上昇パターンの8曲であるが、いかがであろうか？「I LOVE YOU」を除けば中高年の多くの方の耳に馴染んでいる曲ばかりであろう。2027年にはこれらの多くはなおベスト100に残っていると思われるが、それでも2057年には大半の曲が圏外へ去ることが予想される。特に注目したいのは、早・強・密・上・J・上の2曲の将来的動向である。すでに触れたようにこの合体型パターンは特に大きなプラス効果を期待しうるパターンであり、そのプラス効果の程度が今後検証されていくことになる。またこの第3－5期の残りの47曲の中で他の様々な要因によって、たとえばサビ・メロディの力によって、あるいは歌詞・テーマの力によって、またオリジナルを歌った歌手の声の魅力によって将来的にベスト100に残り続ける曲も当然あるはずであろうが、本小論の対象外であり、深入りはしない。それにしても特にこの第3－5期のベスト100ランク・イン60曲の将来的行方について改めて思い知ったのは級数的減衰の荒波のもの凄さあるいは無慈悲さである。個人が好きな曲あるいはよく知っている歌の大半が2世代も経るとベスト100圏外へ去り、おそらく2100年頃にはそのほとんどが忘れ去られてしまう。諸行無常の嘆きが聞こえてきそうである。

最後にベスト10曲の将来的行方についてはどうか？以下1曲毎、順位順に考察を進めていく。

第10位 LOVE LOVE LOVE

1995年に発売されたこの曲は時期的に本小論の対象外の曲ではあるが、取り上げておく。投票当時20代の第1位曲でこの年代の「世代の歌」候補と考えられる。曲調はバラード系で情感・

叙情性もある。メロディ・パターンも早・強・密・上で長く多くの支持を得続ける基本的な条件は満たしている。2027年にはリアル・タイム記憶の支持層は50代となり、やや投票数は減少しそうであるが、ベスト30には残っていると思われる。2057年には、リアル・タイム記憶投票者はわずかとなるが、ある程度世代を越えて20代前後の層にアピールし続ける魅力はありそうなのでベスト100圏内に何とか残るのではないかと考える。

第9位 赤とんぼ

1927年に作曲されたこの曲はすでに「世代を越えた歌」である。子供・母親・祖母の3世代にわたって支持を集めているようである。情感・叙情性は申し分ないし、第八章でも触れたがJ・強・密・上パターンの出だしのメロディはとりわけ魅力的である。少子化・核家族化・赤とんぼの減少といった将来への懸念材料はあるが、2027年にはベスト30、2057年にはベスト50にはランク・インしていそうである。

第8位 秋桜

1977年に発売された曲で支持層は当時30代・40代の女性である。情感・叙情性は過剰すぎるほどにあり、J・強・密・上パターンの美しいメロディは長く記憶に残り続けそうである。が、問題がないわけではない。全体としては暗めで地味なこの曲がベスト10に入るほどの多くの票を集めることができたのは、この曲のオリジナルを歌った歌手山口百恵の魅力のリアル・タイムでの記憶がその一因であったと思われる。リアル・タイム記憶投票者は2027年には60代・70代で投票パワーが落ち、2057年にはほとんどいなくなってしまう。将来的にはジリ貧傾向にあるのは否めないが、J・強・密・上パターンの情感あふれる美しいメロディは次世代・次々世代の中高年女性にある程度アピールし続けると期待できる。2027年には、ベスト50、2057年にはベスト100圏内に何とか残っていると思われる。

第7位 荒城の月

1901年に作曲されたこの曲はベスト10曲の中で最も長く世代を越えて支持されていることがすでに証明されている曲である。リアル・タイム記憶投票者はすでになく、支持層の中で注目すべきなのは大分県の第1位曲という点である。作曲した滝廉太郎の縁の地で世代を越えて歌い継がれていることがうかがえる。歌が世代を越えていくひとつの方法を示していると言える。中学唱歌として作曲されたその当時はミディアム程度のテンポで歌われていたようであるが、現在では通常かなりスローなテンポで日本的情感たっぷりに歌われている。ベスト10対象8曲の中で唯一の第1－第2音符同音進行のJ・強・密・同パターンであるが、すでに指摘してきたように第2－第3音符は4度上昇でかなりの上昇ベクトルが第1→第3音符へと認められるメロディでもある。次世代・次々世代の高齢者層にある程度アピールし続ける力はあると思わ

れる。大分県の強力な支持がある程度続くという条件で2027年にはベスト30、2057年にはベスト100圏内になお残っていると思われる。

第6位 いとしのエリー

1979年発売のこの曲は当時30代の第1位曲でその年代の代表的な「世代の歌」と言ってい。曲調はバラード系で深いとは言えないが情感・叙情性も十分感じられる。メロディ・パターンは早・強・密・上・上の第1－第3音符連続上昇パターンでかなりのプラス効果も期待できる。また長年のアーティスト・グループ活動によって次世代にもある程度この曲の支持は広がっているようでもある。が、懸念材料もいくつかある。先ず、多用とは言えないが部分的に英語の印象的な歌詞が使われており、リアル・タイム記憶投票者が高齢化した時3曲選曲から若干ではあろうが外れる可能性がある。また活動が長いが故に他の自作のバラード系ヒット曲との間で3曲選曲時に票の分散が起きる懸念もある。さらに個性的なボーカル歌唱はリアル・タイム世代には魅力の重要な要素であるが、リアル・タイムではなくなる次々世代にその魅力が十分に伝わるだろうか？リアル・タイム記憶投票者が60代となる2027年にはベスト30圏内にはなお残るであろうが、彼らがほぼいなくなる2057年にはベスト100の当落線上というところだと思われる。

第5位 アジアの純真

1996年に発売されたこの曲は曲のヒットとほぼ同時進行で投票が行われ、当時10代第1位曲となった。アップ・テンポでビートのきいた曲調であり、メロディ・パターンはベスト10唯一の弱＝遅出パターンである。この曲のリアル・タイム記憶投票者は2027年には40代となる。それまでに次のようなことが起きると推測される。この曲への投票者の多くはその後20代末頃までに数曲あるいは数十曲新たなヒット曲を好きになり、それらとの競争の中でこの曲が個人のベスト3曲からすでに外れてしまう場合が十分に起こりうる。またすでに見た加齢による新たな順位付け・ランク付けによって40代頃にはこの曲の順位・ランクは投票者によっては下がっているケースも予想される。さらに弱＝遅出パターンのマイナス効果によって長期記憶となったこの曲が2027年の投票時点で思い出されにくく、3曲選曲されにくくなる傾向もある。21世紀アジアの時代の本格的到来という追い風はあるにせよ2027年にはベスト100の当落線上と考えるのが妥当なところだろう。2057年には、次世代・次々世代の若者に強くアピールするこの曲の新たなカバーのビッグ・ヒットがない限り、ベスト100圏外に去ると思われる。

第4位 高校三年生

1962年に発売されたこの曲は投票当時の中高年の代表的な「世代の歌」と言ってい。すでに触れたようにアップ・テンポではあるが短調メロディで「あー」のロング・トーンの効果的

な使用とも相まって情感・叙情性も十分感じられる曲である。メロディ・パターンもヒット曲の中ではごく数少ないユニークな J・強・密・上・上・上と記しうる3連続上昇パターンでインパクトもあり、大きなプラス効果が将来的にも期待できる。また歌のテーマも日本人の多くが一度は経験するという普遍性を持っている。が、オリジナル曲の音・アレンジは今の若者にはいかにも古くさい。次世代・次々世代の若者にアピールし、「世代を越えた歌」になるために斬新な音の衣をまとったカバーのヒットあるいは高校卒業時に定番として歌われるようなシンプルで少しテンポを遅くした情感たっぷりのピアノ伴奏つき合唱曲へのアレンジ版の出現がぜひとも必要である。こうした試みがうまくいけば2027年にはベスト20、2057年にもベスト30にランク・インしている可能性を持っていると思われる。が、試みがなされなければリアル・タイム記憶投票者の高齢化・死去とともに票の急激な減少によってベスト100圏外に去ることも予想される。難しい局面にある曲と言える。

第3位 神田川

1973年に発売されたこの曲は投票当時40代男性の第1位曲である。情感・叙情性は申し分なし。メロディ・パターンは早・強・密・上パターンでベスト10早出パターンの中では唯一16分音符で始まるメロディで切れ味・インパクトもあり、記憶に残りやすい。が、次世代を越えていく力についてはどうであろうか？時代・シチュエーションがあまりに限定されすぎているのが気にかかる。サビのテーマはある種の普遍性を持つてはいるが、そこに辿りつくまでに時間がかかる。バス付きマンション・住宅で大半が生活する次世代・次々世代の人たちへのアピール度はやや弱いように思われる。メロディは長く残り続けるだろうが、「僕の歌」「私の歌」として歌い継がれていくかどうかについては不安がある。リアル・タイム記憶投票者が70代となる2027年にはなおベスト50には入っているだろうが、彼らがいなくなる2057年にはベスト100圏外へ去っている懸念がある。

第2位 いい日旅立ち

1978年に発売されたこの曲は、30代・40代女性の第1位曲である。彼女たちにとっての代表的な「世代の歌」と言っている。ミディアム・テンポではあるが基本的には短調メロディで情感・叙情性も申し分ない。メロディ・パターンは早・強・密・上・J・上・上と記せる早・J・上合体型の3連続上昇パターンで、この早・J・上合体タイプの中で今のところ最もよく作られたメロディではないかと筆者は考えている。Bメロの入りの「あー」のロング・トーンもいくらかでも深い情感を表現できそうである。カラオケの伴奏なしでもワン・コーラス十分に歌い続けることができそうな力を持っているメロディである。歌のテーマにもマイナス材料は見当たらない。次世代・次々世代の若者にはさすがにアピール度は弱そうであるが、30代以上の女性には耳にする機会さえあればある程度支持され続けられると思われる。またオリジナルの山

口百恵の歌唱を切り離しても十分に魅力のある歌であり、級数的な減衰の荒波にも十分抗する力を持った歌だとも思われる。2027年にはリアル・タイム記憶投票者は60代・70代となるが、メロディの大きなプラス効果も手伝ってなおベスト10をキープしていると思われる。彼女たちがほばいなくなる2057年にはさすがにベスト10は難しいが、なお、ベスト30圏内には残り続けていると思われる。

第1位 川の流れるように

1989年に発売されたこの曲は43万票余りを集め第1位となった。単純計算すると、投票者のおよそ14人に1人のベスト3曲に選曲されたこととなる。年代別では50代・60代の第1位、30代・40代・70代以上でもベスト10にそれぞれランク・インしており、すでに幅広い世代によって支持されている。「あー」のロング・トーンを含め情感・叙情性も当然のことながら十二分にある。メロディ・パターンも早・強・密・上・上の連続上昇パターンで、プラス効果も多いに期待できる。人生を川の流れるに例えた歌のテーマも中高年層には大きなプラス材料である。しかも日本を代表する歌手、美空ひばりの歌唱である。定期的に放送される彼女の特集番組等を通じてだけでも中高年層にこの歌の新たな支持者が増えていくであろう。と、プラス材料ばかりであるが、唯一のマイナス材料は次世代・次々世代の若者へのアピール度の弱さであろう。が、若者たちがやがて中高年になって自分の人生を振り返るようになる時この歌が心にしみるケースも多いと思われる。投票時点では発売後8年とまだ若い歌であったが、急激な減衰の荒波に抗しながらやがて1世代2世代を越えていく歌だと言っていい。2027年にはリアル・タイム記憶投票者は60代以上とはなるが、ベスト10には間違いなくランク・インしていると思われる。2057年にはベスト10は確約できないが、ベスト20圏内には確実に残っていると思われる。

〈結び〉

どのようなパターン・特徴をもつ歌メロディが長く多くの人の記憶に残るのか？という問題設定で本小論を書き始めてから5年がたった。本号でようやくこの結びが書けることとなった。本小論の(1)執筆時点ではここまで号を重ねるとは予想していなかった。各号末尾に記した今後の章構成の予定は毎々変更している。そのことが本小論の試行錯誤ぶりをよく物語っていると言っていい。が、とりあえずなんとかこの結びに辿りつくことができた。

前章でも記しているように早・強・密・上パターンとJ・強・密・上パターンの優劣について最終的な決着はまだ付いていない。さらにその考察の中で両者の合体タイプともいべきより複雑なパターンや連続上昇パターン等についての分析・検討の必要性も浮かび上がってきた。今後の課題としたい。

いくつかの断わりをしておかねばならない。本小論で、分析・考察したのは歌の出だしのほんの数音符のメロディ・パターンのみである。当初サビの出だしのメロディ・パターンについ

でも考察する予定であったが、次のような理由で本小論では章構成から除外した。例えば、第1期の歌は通常の意味ではサビ無しであり、20世紀日本の歌すべてを貫く共通のメロディ・パターンとはなりえないと考えたからである。

また和音とメロディの関係については触れずじまいだった。近年複縦線上でテンション・ノートと考えるメロディ・パターンがヒット曲の中に見られるようになってきているが、このパターン化についても省略せざるをえなかった。さらに第Ⅶ章の音高進行パターンの考察から導き出された上昇ベクトル系メロディの度数によるより複雑なパターン化についても断念せざるをえなかった。先の課題とともにこれらの問題についても機会があれば別稿で論じてみたい。

本小論はあくまでも BS 20世紀日本のうた投票の結果をもとに長く多くの人の記憶に残りやすいメロディ・パターンを導き出したにすぎない。が、今のところこの1775万票余りの空前絶後の票数を越える同種の試みは行われていない。1人3曲自由選曲という投票方法も十分に評価しうるものである。1人1曲だと曲の良し悪しより投票者個人の思い出と強く結びついた曲が前面に出やすくなる。また、1人5曲以上ともなると好きではあるが大好きではない曲が相当程度投票されるというマイナス面が結果に混じってくる。投票者がその選別に相当悩み、想いをめぐらす1人3曲選曲は妥当なところであろう。自由選曲は必要不可欠である。予めリストアップされた中から選曲する場合当然結果に何らかの偏りが生じてくるであろうし、またリストが忘れていた曲への思い出し外的刺激ともなり、本小論の重要な前提の一部が崩れることにもなる。今後同種の投票が行われる場合1人3曲自由選曲の投票ルールはぜひとも継承してほしいものである。

また、本小論で導き出されたメロディ・パターン傾向はあくまでも日本の歌という枠組みあるいはジャンルの中でのみ一定の合理を持っているのであり、外国の歌—例えば英語歌詞の歌にそのまま適合するものでは断じてない。母音の多い日本語より相対的に子音の多い英語歌詞の歌に対する英語圏諸国の人たちの感受性は当然日本人のそれとはすべてではないにしても少なくとも部分的には異なっているであろうからである。ましてや、クラシックの器楽メロディに適用できるはずもないと筆者自身考えている。世界のクラシック愛好者がクラシック器楽曲に関する同種・同規模の投票を行ったとしたら全く逆はあり得ないにしても大幅に異なる傾向が導き出されるかもしれない。こうした問題を考察する余力はもはや筆者にはない。本小論のメロディ・パターン論は日本の歌に限定されたものなのだとすることを強く認識しておく必要がある。

さらにまた本小論は投票時点の投票者を取り巻く音楽メディア環境—CDやテープあるいはテレビ・ラジオ放送等々—を前提として考察がなされている。投票12年後の現在それは大きく変化し始めている。携帯・ネット配信によるダウンロードやデジタル・オーディオプレーヤーの普及拡大によって人間の脳では記憶しきれないほど多数の曲を超小型ハードディスクに記憶し、手元で瞬時に好きな歌を伴奏つきで呼び出せるようになってきている。いわば記憶の外部

補助装置の急速な進展であり、2057年にはこの傾向は考えられないほどのレベルに達しているかもしれない。だとすると筆者が想定した長期記憶曲の呼び出し3曲選曲のプロセスも大きく変わり、考察の前提のひとつが崩れることになるかもしれない。が、なお多くの人は心から好きなベスト3曲ぐらいはそうした外部ツールに頼らずに自分の脳から直接呼び出し、選曲するのではないかと思うのだが、いかがであろうか？無論半世紀も後のことは誰にもわからない。

本小論の長い考察を終えた今でもなお悩ましく思っているのは密と疎の問題である。他の早・J・強・弱・上・同・下の文字パターンはそれなりに明確な基準に基づいてパターン化できたと筆者は考えているが、密と疎のそれには大きなジレンマがあった。早出・Just・遅出パターンそれぞれで密と疎の設定の仕方が異なっている点は筆者自身納得もしているが、問題は両者の選別基準を拍距離＝拍の長さに求めている点である。拍距離を決めるものになる楽譜上の拍子の表記は若干の曲で問題を感じている。演奏上はほとんど問題はないのであろうが、表記の仕方によってはテンポの問題は別にして拍距離と時間距離（＝拍距離の実時間の長さ）の間に密・疎判別における大きな誤差が生じる場合がある。たとえば「学生時代」は参考にした楽譜表記からやむなく疎と判定せざるをえなかったが、筆者自身の時間距離感覚ではむしろ密と判定したほうがいいと思っている。また当然のことながらテンポの問題がある。たとえば「荒城の月」は1拍なので密と判定しているが、現在のようにスローテンポで歌われる場合むしろ疎と判定したほうがいいと思っている。現在の脳科学では長期にわたるメロディ記憶における拍距離の記憶と時間距離の記憶およびそのメカニズム・符号化・保管・呼び出しの問題について研究はまだ進んでいないようなので科学的に甲乙を論じることはできないが、筆者自身は密・疎の判定は時間距離を基準にしたほうがベターだと個人的には考えている。が、先に触れた「荒城の月」のようにテンポ変化した様々な演奏やカバー曲の時間距離をどの音源や演奏をもとに計測すればいいのかといった実際上の極めてわずらわしくまたあいまいな問題が生じてくる。こうして筆者の悩みはいまも解決されないままである。

第Ⅸ章で簡単に考察したベスト100・ベスト10曲の将来的行方についてはいかがだったであろうか？個別的楽曲の将来的行方について考えるのは本小論の本来的な目的ではなかったが、未知の条件があまりにも多すぎるとはいえ未来について考えることによって本小論の意味が少しでも理解しやすくなるのではないかと思い、あえて考察した。第1期から第3－5期、そして明言はしなかったが第7期までおよそ30年スパンで過去・現在・未来を考えることによって過去から現在まで生き続けている歌の底力の凄さを思い知ることができるし、また未来には消え去っていくかもしれない現在の人気曲のはかなさをも感じることができる。年月の進行による記憶の淘汰は1日も休むことなく静かに行われ続けている。その中でやがて長く多くの人の記憶に残り続ける歌とそうでない歌とにでこぼこはあるにせよ選別されていく。本小論はその選別の基準となる一つの要素、すなわち歌の出だしの数音符のメロディ・パターンに潜む傾向について分析・考察し、18に分類された各パターンの優劣をある程度ランク付けし、提示した

ものである。何度も述べてきたように歌の個別的価値は、そこからメロディ作りが始まるポイントとはいえ出だし数音符のメロディによって決して決まるものではない。が、それでも、もはや多言しないが本小論で見てきたようにそのパターンによってははっきりとした優劣傾向があるのもまた確かなことなのである。本小論では取り上げることができなかったが、サビの出だしの数音符のメロディ・パターンについても今のところ断言はできないがある程度同様の傾向を確認しようという感触はすでに得ている。たかが出だしの数音符ではあるが実に重要な数音符であると筆者は確信している。

最後にこれまで日本の歌メロディに関して個々の曲の部分的特徴に言及したものはあったが、すべての歌に共通した分析視角を据えてメロディ・パターンとしてトータルに比較考察した研究はなかったと思われる。本小論がそうした研究に一石を投じることができたとしたら喜びである。特に本小論がメロディ作りに興味を持つ日本のソングライター達の誰かに何らかの刺激となり、やがて将来長く多くの人の記憶に残り続ける日本の歌が一曲でももし生まれたとしたら望外の喜びである。5年の長きにわたって書き続けた本小論もここで筆をおくこととする。

(主な参考文献および資料)

- 藤井正博「日本の歌メロ進化論（序）—Aメロディの起動と[A]第1小節線—」『神戸山手短期大学紀要』41号、1998年
『全音歌謡曲大全集〔1〕—〔8〕』全音楽譜出版社
『日本流行歌史—上・中・下—』社会思想社、1995年
柿本堯夫編『音楽心理学の研究』株式会社ナカニシヤ出版、1996年
池谷裕二『記憶力を強くする—最新脳科学が語る記憶の仕組みと鍛え方—』講談社、2001年
『BS20世紀日本のうた—グランド・フィナーレ—』（録画ビデオ）1998年
ハンス・ペーター・シュミッツ『演奏の原理』シンフォニア、1977年
ホアン・G. ローダラー『音楽の科学』音楽之友社、1993年